

【初音】はつね

その年最初に鳴く鶯の声を初音といいます。当然、春の季語に属します。

広義には鶯に限らず、時鳥や鹿の鳴き声、虫の音も初音ということもあります。

春を告げる鶯の「ホーホツケキョ」と鳴く清らかなソプラノは古来評価が高く、夏の時鳥と人気を二分してきました。その鳴き声が法華経と聞き取れることもこの鳥の人気の要因と思われます。若い鶯の未熟な初音には、早春に相応しい初々しさが漂います。勿論、この囀りは求愛行動です。古くから関心を持たれていた鳥だけに鶯の別称は春告げ鳥・経読鳥・黄粉鳥・匂鳥・花見鳥など多く、初音の他、鶯に関わる季語は十数語はありそうです。またそれらは春の季語に限るものではありません。

主なものを拾ってみましょう。

「初鶯」は新年の季語で、初音と混同されがちですが異義語です。飼っている鶯を正月に鳴かせることをいいます。時には鳴き声を競い合わせたようです。ちなみに、飼い鶯の糞は女性の高級洗顔料だったそうです。

「鶯の谷渡り」は「ケキョ ケキョケキョ」と連続して鳴く声をいいます。この鳴き声は警戒音ではないでしょうか。

さらに、鳴きながら移動する様を「流鶯[ルオウ]」といいます。

初夏になると鶯は上手に鳴けるようになります。そんな鶯を「老鶯[オイウグイス]」といいます。元は漢語のようです。

柴野栗山の漢文『雛鶯説』に「老鶯の善く鳴く者に就き、その聲を学ばしむ」

とあるように手本となるほど老練な囀りの鶯を老鶯というのです。

漢文には時代を経たものを表す文字に「老」「古」「旧」があります。

「古」は昔・年代、「旧」はふるびた様のネガティブな言い方となります。それに対し「老」はベテラン、熟達したといった尊敬の念を込めた意味で使われる言葉です。

老鶯を「生氣のない囀り」とする歳時記がありますが、「老」の本来の意味から外れた解釈ではないでしょうか。

恋が成就すると鶯は当然鳴かなくなります。しかし、元気がなくなったわけではなく巣作り・子育てに最も忙しい時期といえましょう。

紫式部『源氏物語』巻二十三の巻名は「初音」です。光源氏三十六歳正月。昨年完成した六条院にて初めての正月を迎えます。『源氏物語』の長編の中でもひとときわ華やかな場面といえましょう。この年の元旦は子[ネ]の日と重なっていました。

源氏は邸内の女君たちを訪れ初春を祝います。源氏が明石の姫君を訪ねると童女たちが小松引を楽しんでいました。

・年月をまつに引かれてふる人に今日鶯の初音聞かせよ

明石君が明石の姫君に送った和歌です。巻名はこの歌に因みます。

この歌は「長年姫と会うことを待ちわび過ぎた私に、初子の今日はせめて鶯の初音を聞かせて

ください」という意味になるのでしょうか。

松＝待つ・古＝経る・初音＝初子が見事に掛詞となっています。

この場合、「まつ」が姫・「経る人」が自分(明石の君)をさします。「松」と「引く」は縁語でもあります。

松を引くとは一月の最初の子[ネ]の日、すなわち初子[ハツネ]の日に行う行事小松引のことです。子の日遊びともいいます。

小松引とは、若松の苗を根から引き抜いて、松の生命力を吸収しようとする呪術的風習です。主に子どもの遊戯として若菜摘みとともに春の行事となりました。

<http://www.fukushima-museum.jp/news/40.html>

徳川美術館蔵の〈初音の調度〉は徳川家光の長女千代姫が尾張二代光友に嫁いだ際の嫁入り道具です。貝桶・厨子棚・黒棚・書棚・文箱・短冊箱・角赤手箱・鏡台・化粧道具・碁盤・双六盤・香道具などあり内五十七点が重要文化財の指定を受けています。幸阿弥長重の作で蒔絵の最高峰といわれていることは皆様ご存知の通りです。

幸阿弥長重は五十嵐家と並び蒔絵を伝える幸阿弥家の十代です。初代道長は足利義政に仕えた蒔絵師でした。同朋衆であったとも伝えられています。

当時の蒔絵師(蒔絵屋)の実態はあまりよく分かっておらず今後の研究が待たれます。

幸阿弥長重が如何なる人物であったのか、同朋衆が如何なる組織であったのか、蒔絵工房は如何なる組織であったのか詳しく知りたいところです。

<http://www.morita-fumiyasu.com/>

～ Copyright (C) 2011 ～私の書齋～ 森田文康. All Rights Reserved.～